

定例研究会要旨

日時：平成 20（2008）年 5 月 21 日 18:30～20:30

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：ビルマ語の格標示

発表者：岡野 賢二（東京外国語大学外国語学准教授／ビルマ語学）

本発表の要点は 2 点ある。一つはビルマ語の格標示体系における#（ゼロ助詞）の問題，もう一つは派生・複合名詞が格標示を受けた項を支配しているように見える現象の報告である。

1. ビルマ語の格標示体系

従来ビルマ語の格は助詞によって標示されると説明されてきた。実際には助詞が現れない場合があるが、そのような現象には#による標示が仮定されてきた。ところが#で標示されるものはどのような格であり、どのような条件で#となるのかははっきりせず、また語順との関連についても十分に説明されてきていない。

基本的な格を標示する格助詞は-ka.〈主格，奪格，過去〉，-ko_〈対格，与格，向格，未来〉，-hma_〈於格〉，-ne.〈共格，具格〉，-ye.〈属格〉などで、このうち#で標示し得るのは主格，対格，与格，向格，於格，属格である。主格，対格，与格ともに#で標示し得るとするのは、#だけでは文の解釈が決定できないということである（e.g. 'u:le:=# ho_=kaun_mäle:=# dābo: ca.-te_「叔父さんはあの娘を/叔父さんをあの娘は気に入っている」）。しかも語順も必ずしも意味を確定しない（e.g. ho_=kaun_mäle:=# 'u:le:=# dābo: ca.-te_「あの娘を叔父さんは/あの娘は叔父さんを気に入っている」）。

これらの文の意味が決まるのは(1) 'u:le:「叔父」が発話者自身である場合に主語として解釈される，(2)文頭に現れる語が主格-ka.で標示されるとそれが主語と解釈される，(3)ある項が対格-ko_で標示されると対象と解釈される，等である。また(4)可能な状況で、下降調化が起きた名詞は対象として解釈される

（e.g. 'u:le:=# ho_=kaun. myin_=p^hu:=te_「叔父さんはあいつを/*叔父さんであいつは見たことがある」）。つまりいずれかの解釈を補強（差異化）する状況、すなわち(1)文脈的な状況や(4)形態的な変化があれば格助詞は必ずしも生起し

なくてよい（ただし格助詞が現れると、それ以外の解釈が排除されるという点に注意する必要がある）。逆に差異化されないと解釈が困難になる場合、格助詞がほぼ義務的に現れる（e.g. $\eta a. = k^h\ddot{a}le: * = \# / = ko_l\epsilon's^hauN_ \# pe: = t\epsilon_$ 「私の子供にプレゼントをあげた」）。

つまり#となる条件、あるいは格助詞が現れない条件はこのように統語的要請というより文脈的なものといえよう。さらに#標示を必要とする積極的な理由として動詞連続構文を挙げたい。動詞連続構文では、一つの項が意味解釈上、二つの動詞と別個の関係を持っているような場合がある（e.g. $ho_ = s^hain_ = \# \ddot{t}wa: = sa: = me_$ 「あの店に行って食べる/食べに行く」）。このとき、ある一方に格助詞が現れると、そちらの情報が談話の中でより重要度を持つようになる（e.g. $ho_ = s^hain_ = hma_ \ddot{t}wa: = sa: = me_$ 「あの店で（行って）食べる」、 $ho_ = s^hain_ = ko_ \ddot{t}wa: = sa: = me_$ 「あの店に行って食べる」（わざわざというニュアンス））。#であればどちらのイベントの重要度が高い、ということはない。

2. 項を伴う派生名詞・複合名詞

派生名詞や複合名詞が格助詞で標示された名詞を項としているように見える現象がある。この現象についての報告や研究はこれまでほとんどない。

ここでは名詞化接頭辞 \ddot{a} -と複合名詞を形成する-hmu. 「件」を取り上げた。派生名詞、複合名詞では主格-ka.や対格・向格-ko_, 未来の時の-ko_で標示された名詞句が現れ得る（e.g. $c\ddot{a}n\ddot{o}_ = \# di_ = \ddot{t}\ddot{a}c^h iN: = ko_ \ddot{a}\text{-}cai's^houn: = pa_$ 「私はこの歌が一番好きです（澤田 1999）」、 $di_ = ko_ \ddot{t}oun: \text{-}na_ yi_ = \# / = ko_ \ddot{a}\text{-}yau' \text{'}eiN_ = ka. t^hwe' = la_ = k^h\epsilon. = \#$ 「ここに3時に着くように家から出てきなさい」、 $win_ji: = ka. bo_jou' = ko_ \ddot{t}a'p^hya' \text{-}hmu.$ 「大臣が将軍を殺害した事件」）。また対格はそのままに主格が属格になる場合もある（e.g. $win_ji: = ye. bo_jou' = ko_ \ddot{t}a'p^hya' \text{-}hmu.$ 「大臣の、将軍を殺害した事件」）。属格名詞が動作主になるというのは、 $\ddot{a}p^he_ = ye. da'poun_$ 「父の写真」が(1)父が所有者、(2)父が動作主としての解釈は自然だが、(3)「父が写っている写真」という解釈には強い文脈的な暗示が必要であることと並行的である。

派生・複合名詞における格支配についての考察は端緒についたばかりで不明な多く、ビルマ語の統語構造を明らかにする上でも今後の調査が不可欠である。